

「常識」を突破させる神 ―マグダラのマリアの「覚醒」―

大学コミュニティ人間科学部准教授
輪島 達郎
Wajima Tatsuroh



イエスは週の初めの日の朝早く、復活して、まずマグダラのマリアに御自身を現された。このマリアは、以前イエスに七つの悪霊を追いついていただいた婦人である。マリアは、イエスと一緒にいた人々が泣き悲しんでいるところへ行つて、このことを知らせた。しかし彼らは、イエスが生きておられること、そしてマリアがそのイエスを見たことを聞いても、信じなかった。（マルコによる福音書 第一六章九〜一一節）

マグダラのマリアはカトリック教会や聖公会では「聖人」とされています。性的不品行を犯した「罪深い女」であつたにもかかわらず、主イエスと出会つて改心し、主イエスの足元で主イエスに香油を注ぎ、改心の涙で主イエスの足を濡らし、それを自分の髪で拭い（ルカによる

福音書 第七章三六〜五〇節）、主イエスが復活された際には最初にマグダラのマリアにお姿を現したとされるからです。十二使徒に加えて、十三番目の使徒と言われることさえあります。他方でマグダラのマリアには、「罪深い女」であるだけでなく、娼婦であつたとされたり、主イエスをも惑わせて主イエスの愛人になつたとか、主イエスの妻となつたなどという伝承も―あくまで教会外での話ですが―根深く存在します。

しかし、このような伝承には聖書的な裏付けがないばかりか、マグダラのマリアを聖人とする根拠である、マリアが主イエスの足を髪で拭つた「罪深い女」と同一であるという理解さえも、じつは聖書に明記されているわけではありません。

別の言い方をすれば、マグダラのマリアは聖

人として神格化されるような見方と、罪深い女として貶められる見方という、相反する見解にさらされてきたことになりました。そしてこれらはいずれも男性視点のマグダラのマリア像であると言えます。男性の女性にたいする崇拜と嫌悪という裏表の感情を示しているからです。男性による女性嫌悪は「ミソジニー」と呼ばれて、古くは魔女狩りという形で現れました。

聖書に戻しましょう。復活の主イエスが最初にマグダラのマリアにご自身を現されたあと、「マリアはイエスと一緒にいた人々が泣き悲しんでいるところへ行つて、このことを知らせた」のですが、すぐそのあとで「彼らは、イエスが生きておられること、そしてマリアがそのイエスを見たことを聞いても、信じなかった」とされています。

なぜ「イエスと一緒にいた人々」はマリアの

証言を信じなかつたのでしょうか。主イエスご自身が「三日目によみがえる」と再三約束しておられたはずです。女性にたいする嫌悪、マリアその人にたいする不信、あるいはその両方が推測されますが、おそらく彼らは「常識」的な判断をしたのだらうと思います。みな一様に信じなかつたわけですから、突飛な判断をしたとは思えません。いくら主イエスがおつしやつたとしても、われわれの目の前で十字架につかれ、息絶えた主イエスがほんとうに復活するなど考えられない。たとえ復活されたとしても、女性であり、主イエスのお世話係にすぎないマグダラのマリアに最初に現れるなどということはありません。

他方、マグダラのマリアはこのような「常識」とらわれることなく、主イエスの呼びかけに応えた。誰にも強制されず、誰の目も気にせず、主イエスの呼びかけを受け入れた。恐れはあつたにしても、迷いなく。マグダラのマリアはなぜそのような大胆なことができたのでしょうか。話は変わりますが、二〇二二年に閉学した青山学院女子短期大学は「覚醒した女性の育成」を教育方針としてきました。「覚醒した女性」とはそもそも何なのか。何に「覚醒」した女性なのか。

一九六〇年代、南米コロンビアで始まつたらテン・アメリカのカトリック聖職者たちの実践運動に「解放の神学」があります。グスタボ・グティエレスという司祭がこの運動の中心人物

のひとりでした。この運動とも関連の深いブラジルの教育学者、パウロ・フレイレの識字運動はよく知られています。読む力をつけることによって、地域の基礎共同体のなかで対話しながら聖書と新聞を読むという運動です。そうすること、中南米の貧困に苦しむ人々が、アメリカ資本と結んだ支配層によっていかに抑圧され、いかに人間の尊厳を踏みにじられ、いかに不当な扱いを受けているかを知り、解放へのたたかいに赴くことができるということです。このことをフレイレは「意識化」と呼びました。これをグティエレスの「解放の神学」の文脈に置き換えれば、正義の実現すなわち抑圧からの解放のために、神が自分たちに寄り添い、働きかけているという事実を知り、受け入れるということ。このことをグティエレスは「解放の霊性」と呼びました。

青山学院女子短期大学の教育方針に掲げられていた「覚醒した女性の育成」の「覚醒」とはまさにこのようなものです。大学での学びを通して、女性が不当に差別されているという事実を目覚め、それでもなお傍らで主イエスが力づけてくださっていることを知る。いやむしろ、主イエスは差別されている者のそばにおいてこそ、ともに歩んでくださり、ともに正義を実現してくださることを学ぶ。理想論ではありません。筆者は本学ジェンダー研究センターのプロジェクトの一環として、青山学院女子短期大学の卒業生のみなさんに第一期生から順にインタ

ビューし、その記録をまとめる仕事に従事していますが、学生時代に主イエスと出会い、卒業後も人生のさまざまな局面において主イエスに励まされながら、抑圧された人々のために働いてきた卒業生を何人も見てきました。

マグダラのマリア自身も、主イエスに出会う以前は、蔑まれ、差別され、それゆえ孤独であることに何の疑問も感じることなく生活していたかもしれせん。それが当時の「常識」だったからです。しかしマリアは主イエスと出会い、自分の境遇が神の前では不当なものであると確信したに違いありません。自分など蔑まれて当然だと思つていたら、主イエスの復活を大急ぎで伝えに行こうなどとは考えないはずです。それどころか、主イエスの復活を信じることさえできなかったでしょう。現に、「常識」とらわれていた弟子たちはこれを信じなかつたのです。

神はマグダラのマリアに「常識」を大胆に超えさせる働きかけをなさいました。キリスト教の歴史において、しばしば「大覚醒」とか「リバイバル」と呼ばれる運動が起きていますが、このような運動をまつまでもなく、主イエスは私たちの傍らで、私たちの覚醒を促し、「常識」を力強く突破する力を与えてくださいます。私たちもまた、主イエス・キリストに励まされながら、人の正義ではなく、神の正義を喜んで実現する歩みを続けてまいりたいと思います。